東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

TGUISSにおけるESDの取り組み：「国際教養」における実践例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-07-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤木, 正史, 宇佐見, 尚子, 小林, 廉, 佐藤, 毅, 西口, 翔子, 水本, 肇, 本田, 千春 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173413

国際中等教育研究　第14号 p.223 ～ 232
東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要

TGUISS における ESD の取り組み

－「国際教養」における実践例－

TGUISS commitments to ESD

－practical examples in International Liberal Arts－

国際教養委員会
藤木正史,宇佐見尚子,小林廉,佐藤毅,西口翔子,水本肇,本田千春

１章　はじめに

東京学芸大学附属国際中等教育学校（以下，ISS）では，2011 年にユネスコスクールに加盟して以来，主として ISS 独自の学習領域「国際教養」において，ESD（Education for Sustainable Development）の取り組みを実践してきた。この間，2015 年 9 月には SDG s （Sustainable Development Goals）が国連サミットで採択され，2019 年 12 月には「持続可能な開発のための教育：SDGs 達成に向けて（ESD for 2030）」の決議が採択されて，SDGs 達成のための ESD という位置づけがなされるようになってきている（文科省, 2019）。これらの動きを受けて ISS でも, SDGs を意識した ESD の取り組みを行ってきているところである。

本稿では，ISS における ESD の基本的考えや全体像について改めて整理するとともに，2020 年度における ESD の実践例を示す。以下ではまず，ISS における ESD の基本的考えや概要，全体像について，特に「国際教養」との関連を示す。次に，前期課程と後期課程に分け，具体的な実践例を示す。

２章　ISS における ESD の基本的考え，概要，全体像

１節　ESD と ISS の親和性

ESD は，現代的な社会課題をジブンゴトとして捉え,身近なことから取り組み,課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出す,またそれにより持続可能な社会を創造していくことを目指す学習・活動,とされている。そして ESD で育みたい力が図 1 である。ISS の育てたい生徒像や IB の 10 の学習者像との対応させてみると,その親和性が読み取れる。例えば,帰国生が約 4 割となる ISS において,「異文化への寛容性・耐性を持った生徒」は，授業を含めた学校生活の中で様々な背景を持つ生徒がいるからこそ,常に価値観の違いと向き合うことになったり,考え方の相違を踏まえて最適解を見つけていったりする点で自然とトレーニングされていく。このことはまさに多様性の尊重・非排他性など「持続可能な開発に関する価値観」を醸成していくことになるだろう。学校での生活環境そのものが ESD に繋がっているのである。

ESD で育みたい力	ISS の育てたい生徒像	IB の 10 の学習者像
□持続可能な開発に関する価値観 人間の尊重,多様性の尊重,非排他性,機会均等,環境の尊重等	(4) 異文化への寛容性・耐性を持った生徒	Open-minded Caring Balanced Principled
□体系的な思考力 問題や現象の背景の理解,多面的かつ総合的なものの見方	(1) 現代的な課題を読み解く力を持った生徒	Knowledgeble Inquires Risk-takers
□代替案の思考力 批判力	(2) 知識とイメージを自分で再構成する力を持った生徒	Thinkers Reflective
□データや情報の分析能力	(2) 知識とイメージを自分で再構成する力を持った生徒	Thinkers Knowledgeble
□コミュニケーション能力	(3) 対話を通して人との関係を作り出す力を持った生徒	Communicators
□リーダーシップの向上	(3) 対話を通して人との関係を作り出す力を持った生徒	Risk-takers

図１　ESD で育みたい力と ISS の育てたい生徒像および 10 の学習者像

２節　「国際教養」と ESD

ISS において ESD に取り組む中心となるのが「国際教養」である。「国際教養」では,国際理解・人間理解・理数探究の関わる現代的な諸課題についての総合的な学習を通して,主体的・共同的に課題を解決し,自己の生き方を考えることができるようになることを目的とした ISS 独自の学習領域である。

学年	科目名（時数）	単元名や内容
1	総合的な学習の時間（３）	**「国際１：理数探究」（１）** 教科行事との連携（美術科） 富士ワークキャンプと事前・事後学習 スクールフェスティバルでの活動 Service & Action（社会貢献活動） 課題研究活動 HR や道徳における活動
2	総合的な学習の時間（２）	**「国際２」（１）** 教科行事との連携（国語科） スクールフェスティバルでの活動 Service & Action（社会貢献活動） 課題研究活動 HR や道徳における活動
3	総合的な学習の時間（３）	**「国際３」（１）** 沖縄ワークキャンプと事前・事後学習 スクールフェスティバルでの活動 Service & Action（社会貢献活動） 課題研究活動 HR や道徳における活動
4	総合的な探究の時間（１）	**「Personal Project／課題研究」（１）** Service & Action（社会貢献活動）
5	総合的な探究の時間（１）	「課題研究」 バンクーバーワークキャンプと事前・事後学習 Service & Action（社会貢献活動）

6	総合的な探究の時間（1）	**「課題研究」（1）** **「国際A：国際協力と社会貢献」（2）** **「国際B：ファシリテーション実践」（1）** Service & Action（社会貢献活動）
		※**太字**は授業・科目、（）内の数字は単位数

図2　ESDと「国際教養」の活動のつながり

各学年とくに前期課程においては,自分たちで関心を持った現代的な諸課題を,学校行事や HR 活動・道徳を関連させながら探究していく。また研究（調査）方法や学問的誠実性についても学んでいく。1学年「国際1：理数探究」においては,データの分析や実験の検証を通して課題の解決方法について提案したり,各学年のスクールフェスティバルの出し物は国際教養の3分野にそくして生徒自身が考えたり,またクラスを超えたグループで活動したりすることで,コミュニケーションやリーダーシップについて身につけていく。

後期課程ではIB MYPにおける「Personal Project（個人研究）」,また「課題研究」において地域・社会・国内・国際的な様々な課題をテーマとして設定し,研究を進めていく生徒も多い。そうした指向性は,前期課程での経験に基づいていると考えられ,ISS 生徒が能動的に取り組む Service & Action（社会貢献活動）での実際に課題にふれる,また支援の一端を担うという経験も大きく影響しているだろう。

3章　前期課程におけるESDの事例

1節　第1学年の実践例

14回生第1学年では，SDGsの目標と関連のある本を紹介する「ビブリオバトル」を行った。予選は各クラスから1名ずつの4名で構成された班で行った。本選は各班のチャンプ本のプレゼンを隣の教室で行った。本活動を行う前に，SDGsに関して，目標を分類する活動を行うことでそれぞれの目標についての理解を深めたり，つながりを考えたりしていた。また，世界の子どもたちの現状からSDGsについて考える活動を行っていた。司書教諭と連携し，ISS図書館に「SDGsコーナー」を設けたが実際にこのコーナーの本を借りた生徒は少なく，コーナーの本紹介を参考にして本を選ぶ生徒が見られた。以下に挙げた生徒のふりかえりからもわかるように，興味のある目標に関する本を自ら探す生徒が多かった。

【生徒のふりかえり①】
SDGsの中で個人的に気になっていたものがあってそれが今回のビブリオバトルで選んだ 9「産業と技術革新をつくろう」の目標です。技術革新の基盤って何？など9の目標に対して疑問をたくさん抱えておりずっと気になっていました。自分が9に納得する＋それを他者に伝えるということがビブリオバトルでできました。他者の発表という点では，みんな的確でわかりやすく，本の紹介にとどまらず，自分がこの本を読んだ中でSDGsに対して変わった考え方など発展的なことも考えていてすごかったです。

【生徒のふりかえり②】
私は第 2 回ビブリオバトルで海の本を選び発表しました。私は本を読みながら海の深刻さを知ったので，「えぇ」というおどろきの連続でした。しかし，SDG s と関連づけて本の半分くらいから「どうしたら変えられるか」という未来に向けての考えが持てました。他者の本では，「この本のどこかつながるの？」という疑問がありましたが，発表を聞いて，そんな考え方があるんだ，面白いという感情に変わりました。総合的に，ビブリオバトルは身の回りのものと自分，SDG s の関りが明らかにすることができました。

【生徒のふりかえり③】
私は『世界で一番貧しい大統領の話』という本を紹介しました。この本は SDG s の目標と深く関りがあり，とてもいい本だと思いました。世界の社会問題などのことが書かれており，今の私たちには何ができるかなども紹介しました。他の発表者たちは本の選択もよかったのですが，それに加えてプレゼンの方法も参考になりました。私が一番読んでみたいと思った本は『私は 13 歳で学校に行かず，花嫁になる』という本です。学校にいけない人がいることや小さいころに結婚しないといけない地域もあることはなんとなく知っていました，しかし，本当に何もやらずに花嫁になる少女の話を聞いてショックを受けました。発表者は他にも少女の話があると言っていたので，この本を借りて今の世界の姿を見てみたいと思いました。

【生徒のふりかえり④】
自分は『サード・キッチン』という人種差別に関わる本を読んだ。他の人の発表には 6 や 13,14,15 といった自然に関わるものが多かった。発表を聞いていて読んでみたいと思った本は大きな壁に囲まれた所から抜け出すとそこには広くてきれいな世界がひろがっているという話で 17,12 などのこれから私たちが意識していかなければならないことが詰め込まれていておもしろそうだった。

図 3　SDG s ビブリオバトルに関する生徒の振り返りの例

本活動をとおして，SDG s の各目標をジブンゴトとして考えたり活動したりするきっかけになったと考えられる。

2 節　第 2 学年の実践例

13 回生第 2 学年の国際教養では,各教科の横断や,調査方法についての学びを深めながら,ESD や SDG s を意識した取り組みを行った。理科との連携で南極教室,国語科との連携で日本文化探訪として能楽師の佐野登氏より日本の伝統芸能について,数学科との連携で統計的問題解決,本委員会の取り組みとして教員へのインタビュー等多くの学びを得ることができた。ここでは主に 2 つの取り組みについて報告する。

まず,南極教室では,南極で働く方々の仕事の意義や仕事の多様性,環境問題,研究としてのフィールドワークの意義について目標に掲げた。事前学習として,元南極観測隊隊員の ISS の堀内教諭による講義を行った。次に,Zoom を使用して実際に中継を交えながら現地の隊員とリアルタイムで交流をした。そして,事後学習として再度堀内教諭より貴重な体験を踏まえて講義を行った。生徒たちは,これらの活動を通し,南極の美しいだけでなく厳しい環境に触れたことによって,地球環境の未来像を予測するといったことに対してきっかけをつかんだようだ。

次に,統計的問題解決では,統計的な資質・能力を育むことを目標に掲げ,統計データを使用してどのように問題解決（研究）していくかという観点で授業を進めていった。まず,問題解決に必要なものを数量化できるかどうかということを学び,1～6 人に分かれて研究計画書を作成した。アンケートの取り方や承諾書,研究同意書,倫理申請書の取り扱い等に関しても触れ,そして,設定したその問題に対して検証し,統計的探究サイクルに沿って試行錯誤を繰り返していった。最後はその資料を基に各種グラフに表して,ポスターにまとめ,発表を行った。1 学期から継続的な約 15 時間の活動から,自ら得た客観的なデータを通し,物事を観ることの重要性を習得することができたのではないかと考えられる。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大で様々な活動に支障がでた。社会全体の行動変容が求められる中,新たな時代を見据え,今後もそれに合わせた取り組みが必要となってくると感じている。

3 節　第 3 学年の実践例

12 回生第 3 学年の国際教養では,特に社会課題に日常的に取り組む生徒への支援と,その具体的な取り組みや研究成果を発信する機会として学級や学年の前で活動報告をする機会を多く持った。

12 回生は,前期課程 1 年次から SDGs に焦点を当て,ISS の「国際教養（総合的な学習の時間）」を中心にその理解を深めながら,スクールフェスティバル（学園祭）の場で SDGs をテーマとしたブースを展開するなどして,学びの成果を発揮する機会を設けてきた。今年度は,生徒が主体となって社会課題等についての自分の考えやそれについての取り組みを発信したり,議論やディベート,ワークショップなどの手法で同世代に働きかけたりすることで,効果的に学びが深まる様子が見られた。これは,ESD for 2030 のロードマップに示される 5 つの優先行動分野の「4.ユースのエンパワーメントおよび結集」にも通じるであろう。特に SDGs と関連のある生徒の活動について以下に記載する。

活動 A：動物愛護について知ろう！　～数値規制って何？～
生徒の作成したプログラム（スライド）を教員主導で授業をする形式をとった。2020 年に改正された動物愛護管理法の紹介とともに,動物愛護に対して後進国と言える日本の現状をドイツやアメリカなど他国の統計データと比較をしながら,動物保護や動物虐待などについて理解を深めた。

活動 B：「食」で世界が変えられる？ワークショップ
生徒主導で行われたワークショップ形式の活動である。ビーガン（菜食主義者）について,知識や背景を学園の生徒と共有するとともに,それらを自分たちから地域へ広げていく活動である。2 名の生徒が企画し,知識や背景について情報提供をしつつ,学年の生徒全員で「ビーガン商品の販促ポップ（ビーガンの説明を含む）」を作成した。作成した販促ポップの一部は地域の食料品店に掲示させてもらうに至った。ESD for 2030 のロードマップに示される 5 つの優先行動分野の「5.ローカルレベルの行動の加速化」に貢献する活動と言える。

活動 C：FOOD DRIVE「おうちに眠っている食品で,社会を救おう！#We Scare Hunger」
生徒 3 名によるフードロスをテーマとした活動で,SDG`s の目標 2「飢餓をゼロに」,及び目標 12「つくる責任つかう責任」を掲げ,取り組んだ。この活動は授業での実施ではなく,特定の日時に生徒が校内でおこなったものである。賞味期限が切れていない食料品等を収集し,豊島区の区役所へ寄付する「フードドライブ」を実施した。主催した生徒が認定 NPO 法人フリー・ザ・チルドレ

ン・ジャパン（FTCJ）のイベント「#We Scare Hunger」に参加したことをきっかけに,同 FTCJ から助言を得て企画したものである。

図 4　第 3 学年における SDGs と関連のある生徒の活動例

生徒はコロナ禍における様々な制限を受けながらも,自分たちに「今」できることを懸命に模索していた。オンライン環境上での取り組みもこれまで以上に充実してきている中,学校や教員として支援できることや学習機会も対応していく必要がある。

4 章　後期課程における ESD の事例

1 節　ESD の場としての Personal Project と課題研究について

（1）Personal Project と課題研究とは

後期課程における ESD の場として，Personal Project（PP）と課題研究が挙げられる。まず，この 2 つについて以下で説明する。

ISS では，ISS 独自の学習領域「国際教養」の一環として，後期課程での総合的な学習の時間に対応する「国際 4」「国際 5」「国際 6」の時間において，PP と課題研究を実践している。時期と内容については以下の通りである。

・国際 4…Personal Project（3 年次 2 学期当初～2 学期中旬），課題研究 I（2 学期下旬～）
・国際 5…課題研究 I（～3 学期初旬），課題研究 II（3 学期下旬～）※一般プログラム生のみ
・国際 6…課題研究 II（～2 学期中旬）　※一般プログラム生のみ

PP は MYP の学習の集大成に位置づけられるものであり，個々の生徒は自分の興味・関心に基づいて課題を設定し，1 年間を通して文字通り「個人的（パーソナル）」なプロジェクトに取り組む。名称を見る限り，課題研究と類似したものであるような印象を受けるが，IB・MYP の理念が色濃く見える学習であり，既存の取り組みと異なる点もある。それは主に，「多様な作品／成果の提出」と「プロセスの重視」という 2 点に集約できる。1 点目に関して，PP の成果は，研究論文に限られず，例えばオリジナルの芸術作品（例えば視覚的芸術作品,戯曲作品,舞台作品）や文学作品（小説など）でも可能である。2 点目に関しては，PP の観点に応じて，PP 進行の過程をきちんと記録し，ATL スキルの伸長そのものを言語化・文章化することを要求することがある。これは「報告レポート」と「プロセスジャーナル」の提出に特徴的に表れている（詳しくは小林・廣瀬，2018）。

これに対して，課題研究は，成果は研究論文に限っており，提出を要求しているのは 5 年次 10 月の研究経過報告書，5 年次 1 月の中間論文，そして 6 年次 10 月の最終論文である。すなわち PP と違ってプロダクトの提出を求めているが，これはプロセスを軽視していることではない。6 年間の集大成となってくる 5・6 年生においては，何らかの研究成果（問題解決）を求めていることの表れである。また，課題研究ではおよそ 1 年半かけて各自の問題意識を追究することを想定している点と，個人ではなく複数人の共同研究も可能にしている点が PP との違いでもある。

（2）ESD の場としての Personal Project と課題研究

では，以上のような PP と課題研究が，どのように ESD の場となりうるのか。

ISS では，前節までに示しているように，ISS 入学時から，ESD や SDGs を意識した取り組みを行ってきている。PP や課題研究では，各自がテーマを設定するわけであるが，前期課程からの取り組みを受けて，ESD の対象となる分野にテーマを見いだす生徒も少なくない。こうした生徒らは，

まさに自ら関心を喚起し，理解を深化させ，具体的な行動につながるようなプロジェクトおよび研究を実践している。

ただし，もちろん，生徒全員が ESD に直接的にかかわるようなテーマを見いだすわけではない。そこで，そうした生徒たちも ESD を意識できるよう，プロジェクトや研究を交流する機会を設けている。これは同学年に限らず，異学年でも実施している。具体的には，PP 発表会は 4 年生と 3 年生の間で実施し，課題研究発表会は 5 年生と 4 年生の間で実施している。課題研究については 10 月に 5 学年内で中間発表会も行っている。さらに，校内の課題研究コンテスト（ISS チャレンジ）でファイナリストになった生徒の研究は，2 月の発表会に 3 年生以上が全員参加し，最終審査を行う形をとっている。こうした場で，同級生や先輩たちが，例えば環境，エネルギー，防災，国際理解などに関するプロジェクトや研究を実施することで，刺激を受ける生徒たちも少なくない。今年度はコロナ禍の影響を大きく受けているが，2021 年 1 月現在，少し形を変えることで，PP 発表会と課題研究中間発表会は実施できているところである。

以下では，2021 年度に実施された PP（第 4 学年）と課題研究（第 5 学年）の中から，ESD の対象となる分野にテーマを見いだしているプロジェクトと研究の具体例を紹介する。

2 節　Personal Project における ESD の例

PP におけるプロジェクトテーマのうち，中でも ESD の対象となる分野のテーマに沿ったものをここでは紹介する。具体的には，「環境」や「国際理解」，「福祉」が挙げられる。

「環境」をメインテーマとした生徒は，幼児向けにオリジナルの「環境絵本」を制作した。それを使って，実際に身近にいる 2，3 歳児へ読み聞かせをするといった活動を行った。周囲からの情報によって価値観が形成し始める幼児期にこそ扱いたいテーマであると考え，「環境問題」という事象についてその原因と結果を深く理解することを目的とするのではなく，「人間と自然が共存することの重要性」に着目し，絵本製作をする上でそのメッセージが明確に伝わるよう工夫した。この研究におけるグローバルな文脈は「グローバル化と持続可能性」，また環境教育という観点から，「公平性と発展」である。実際に作成した絵本を幼児向け英会話教室で朗読会を行った。そのときの幼児の反応を通して，どのような絵本の読み聞かせが対象年齢の児童にとって適切な環境教育なのかを研究し，自身の絵本を客観的に評価した。

「国際理解」をメインテーマとした生徒は，小中学生を対象に難民についての理解を深めるワークショップを企画した。ワークショップの参加者は難民問題について正確な知識を得て，それと同時に今ある身の回りの環境を客観的に捉え，感謝の気持ちを持つことが目的である。先進国に暮らす私たちが当たり前のように豊かな暮らしを送ることができている一方で，そうでない生活を送る人たちの環境とその原因を私たちが深く理解する責任があると考え，そのような点から，「公平性と発展」に沿った研究を行った。ワークショップは，この研究を行った生徒自身が参加した経験のある「いのちの持ち物けんさ」を参考に構成されている。ただし，対象年齢を下げたため難民問題に関する基本的な知識を扱うことに重きをおいた。ワークショップを通して参加者同士が自分自身のアイデンティティに向き合い，それを失ったときの感情を再現する。これらを通じて，改めて自分自身を作り上げているものが何かについて深く理解し，難民問題をより「自分ごと」として理解することを目的とした。

「福祉」をメインテーマとした生徒は，中学生を対象にフェアトレードの授業プログラムを企画した。 この企画の目的は，フェアトレードについて正確な知識を持ち，多くの人がフェアトレード

商品に興味を持つことで，日本のフェアトレードがさらに発展することができると考えた。授業形態としては講義形式のものではなく，参加者同士が意見交換をしながら，楽しみながら学ぶことをコンセプトとした。ここではグローバルな文脈として「グローバル化と持続可能性」を挙げ，フェアトレードが広く認識されることで，フェアトレードという仕組みに関わる人が増え，人々の国際問題に対する認識がグローバル化すると共に持続可能性も高まると考えた。

パーソナルプロジェクトのレポート提出後は，翌年に研究を行う中学 3 年生を対象に全員がプレゼンテーションを行う。自分自身の研究内容に加え，研究する上での留意事項を後輩に伝え，後輩から先輩への質問，相談も受け付けた。長期に及ぶ課題に初めて取り組む生徒も多くいるため，特に研究全体の計画の立て方についてのアドバイスを丁寧に行った生徒が多く見られた。生徒たちは，関心のある分野を明確にするために自分自身を掘り下げ，長期にわたる研究を通して意識的にリサーチスキルや自己管理スキル，思考スキルなどを活用し，研究を実施することができた。

3 節　課題研究における ESD の例

10 回生第 5 学年が 1 月に課題研究の成果としてまとめた中間論文のテーマの中から，ESD につながる個人研究と研究グループによる共同研究の実践例を紹介する。

まず，個人研究のテーマとして挙げられるのが，「花粉症患者に向けた『花粉症バッジ』の制作・普及」である。本研究は「コロナ禍で花粉症の症状を感染症と勘違いされるのが怖い」という身近な家族の不安をきっかけに始められており，「花粉症患者と花粉症患者以外の両者が安心して暮らせる社会の創生」を研究目的としている。両者の不安を解消する手法として,「花粉症バッジの考案・制作」を行った。考案に先立ち,全校生徒と教職員の中の花粉症患者を対象にアンケートを実施して花粉症バッジの需要があるかどうかを検証したり，花粉症バッジの作成後には，実際に地域の耳鼻咽喉科の病院に「花粉症バッジと花粉症に関する説明を綴ったリーフレット」を設置し，周知活動を行い，花粉症バッジを見直すためのフィードバックを外部の方から受ける機会を設けたりしていた。また，SNS を活用したバッジの広告を継続して行っており，今後は研究を持続可能なものとするため，クラウドファンディングを活用することも視野に入れたビジネスプランを考案し，実現を目指しているところである。

次に，グループでの共同研究のテーマ例として「食品の調理法ごとの抗酸化力の測定」が挙げられる。この研究は，「食品に含まれる抗酸化物質を効率的に摂取するための摂取方法を提案すること」を最終目的とし,「5 種類の食品（レモン・レンコン・ナス・ショウガ・タマネギ）を,皮の有無それぞれにおいて, 3 種類の調理方法（生,蒸す,ゆでる）で調理したときの抗酸化力を測定し,調理法によってどのように抗酸化力が変化するのかを明らかにすること」を今年度の目的としていた。本研究では抗酸化力の変化の仕方を分類し,どのような要素が関わっているか,多くの実験を通して考察・検証していた。これまでに「抗酸化力を測定した食品は 5 種類 150 サンプル」であるが,今後さらに多くの食品から抗酸化力を測定してサンプル数を増やし，食品ごとに分析して，研究の妥当性を高めていく予定である。

同じく，共同研究のテーマ例として「魚皮が含有する光反射物質の抽出及び安定化」が挙げられる。本研究は「イワシやサバのような魚の体表が光を反射して輝いている」ことに注目し,「なぜこのように魚が光っているのか,どのようにしたら輝きを保持・再現できるのか」という疑問を抱いたことをきっかけとして，「この性質を自転車の安全用反射板のような製品への応用」や「市販の魚類のゴミ削減・有効利用」につなげたいと考え，始められたものである。今年度は「魚類からグアニ

ン結晶板を抽出する方法を確立すること」を研究目的とし，タチウオを使用した実験を行い,抽出に成功した。今後は，抽出物の「不純物除去の方策」を考案し，「他の魚類の表皮からも抽出が行えるかどうかを検討すること」が課題として挙げられている。

これらの研究は，身近な問題意識を出発点としながらも，最終的には，人々が共生できる社会・健康な生活や持続可能な社会の創造に資することを目指したものである。5 年から 6 年にかけては，継続して研究を進める生徒が多く，今回例に挙げた研究も，6 年次に継続して課題研究として進められる予定である。

5 章　おわりに

3 章 3 節でふれられている「持続可能な開発のための教育：SDGs 達成に向けて（ESD for 2030）」は,2019 年 12 月に第 74 回国連総会において決議された,ESD と SDGs をつなぐ新たな国際的枠組みである。2002 年に「持続可能な開発に関する世界首脳会議（ヨハネスブルグサミット）」で日本政府や NGO が提唱した「持続可能な開発のための教育（ESD）」は,その年 12 月の第 57 回国連総会において 2005 年から 2014 年までの 10 年間を「国連持続可能な開発のための教育の 10 年（UNDESD,国連 ESD の 10 年）」として採択された。その後,UNDESD の後継として 2015 年から 2019 年の 5 年間が「グローバル・アクション・プログラム（GAP）」として 2014 年の第 64 回国連総会で決議され,その後継として ESD for 2013 が採択されたのである。その際に,意識されたのが 2015 年の「国連持続可能な開発サミット」で採択された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」であり,その中で「持続可能な開発目標（SDGs）」が設定された。

その関係性を一言で表すのであれば,“SDGs（目標）を達成するための ESD（方法）”ということになる。ESD for 2030 とは,質の高い教育を通じた SDGs の達成を目標としているのである。2 章で述べたように,ISS の通常の教育活動は ESD との親和性が高い,各教科・科目,課外活動を通して生徒が興味・関心を持ち取り組むことが自然と SDGs のいずれかの目標に取り組むことになっていく。その際に,SDGs の 17 の目標と 169 のターゲットがどのようなものかについて生徒個々人が概要だけでも把握することが大切であろう。自身が取り組むことが,今世界で取り組むべき目標とどう関連しているのか,その点を意識するだけで思い込みの思考にはいたらない。

SDGs の前身であった「ミレニアム開発目標（MDGs）」は途上国の課題にたいして先進国が取り組むべきだ,というものであった。しかし SDGs は「誰一人取り残さない（Leave no one behind）」ことを強調しており,途上国だけではなく,先進国自身が足元を見直すことを要請されている。貧困は,遠くアジアやアフリカの途上国の人々だけの問題ではない。彼らにたいする支援はもとより必要だが,いま自分たちが住まう日本において,“取り残されている”人々はいないのだろうか。SDGs を正しく意識することは生徒が自身の視野を広げ,俯瞰的に物事をみることに繋がり,そして自分が属するコミュニティを認識した時にそこにある課題をジブンゴト化していく最初の一歩となる。

ISS においては,前期課程において国際教養の活動の中で様々な経験をし,そして考えを深め,他者と対話し,ふりかえることがなされている。例えば,富士ワークキャンプ（2020 年度はコロナ禍のため実施できず）は,富士山の植生調査だけではなく,富士北麓地域（富士吉田市・忍野村など）の行政や企業,研究機関を訪問しヒアリングを通して,当該地域の課題や魅力をフカボリし,自身で設定した国際教養の 3 つの柱のいずれかの枠組み（視点）で探究していく。その生徒の活動を支える地域のネットワークが形成されている。こうした前期課程の経験をベースとして,後期課程では研究として

課題の解決策を見出そうとしたり（課題研究）,その課題を解決すべく取り組んでいる団体の活動に参加したり（Service & Action）と,生徒が自ら行動に移そうとしている。

ISS の国際教養を中心とする諸活動は,ESD の理念に合致し,SDGs の目標達成に資する人材の育成に繋がっていると言えるだろう。今後の課題としては,SDGs の各目標を生徒自身が関心を持ち,認識していけるように促すことがより必要となってくる。教員は,SDGs“を”学ばせるのではなく,SDGs という目標を通じて,生徒自身の学びや研究・活動の見直し,もしくは位置づけることができるようにサポートしていくべきだろう。

付記

本稿の執筆者の担当箇所は以下のとおりである。

藤木（2 章，5 章），本田（3 章 1 節），佐藤（3 章 2 節），水本（3 章 3 節），小林（1 章，4 章 1 節），西口（4 章 2 節），宇佐見（4 章 3 節）

引用参考文献

小林廉・廣瀬充（2018），「Personal Project と課題研究に関する指導モデル試案：『前期課程での指導』と『PP および PP から課題研究への移行期の指導』に焦点化して」，『国際中等教育研究:東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要』，11，107 -121.

文部科学省（2019），「持続可能な開発のための教育：SDGs 達成に向けて（ESD for 2030）」について～第 74 回国連総会における決議採択～.
https://www.mext.go.jp/unesco/001/2019/1421939_00001.htm

TGUISS commitments to ESD

—practical examples in International Liberal Arts—

Abstract

Since Tokyo Gakugei University International Secondary School has joined the UNESCO associated schools network in 2011, the school has been practicing ESD (Education for Sustainable Development) through “International Liberal Arts”, the school’s original field of study. While organizing the relationships between ESD and International Liberal Arts, the basics and the whole idea of ESD at ISS will be discussed here, with some practical examples.